

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	田中 美穂
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題 目 Predictive Factors and Scoring System for Intravascular Large B-cell Lymphoma among Suspected Cases: A Single-center Retrospective Analysis （血管内大細胞型 B 細胞リンパ腫疑い症例における予測因子とスコアリングシステム—単施設後ろ向き解析—）
	掲載誌 International Journal of Dermatology 2024; 63: 79-84
	主査 山野 嘉久 副査 大島 久美 副査 佐藤 知雄
[論文の要旨・価値] <目的> 血管内大細胞型 B 細胞リンパ腫（Intravascular Large B-cell Lymphoma: IVLBCL）は、悪性リンパ腫の稀な亜型であり、リンパ節腫脹を呈さないため診断が困難で、時に診断の遅れが致死経過の要因となる。早期診断にはランダム皮膚生検が有用であるが、どのような症例に対して生検を実施すべきであるかの適応の判断に苦慮する場合がある。そこで本研究では、生検前の段階における IVLBCL の診断予測因子を同定し、そのスコアリングシステムについて検討した。 <方法> 対象は当院で過去に IVLBCL を疑われ皮膚生検を実施した 53 例。臨床情報、最終診断名を収集し、IVLBCL 群と非 IVLBCL 群とで症状や検査所見、画像所見の差について検討した。また両群で有意差が認められた 3 項目について ROC 分析にてカットオフ値を決定し、各項目のカットオフ値を超える所見がある場合を 1 点、無い場合を 0 点とするスコアリングシステム（計 3 点）を作成し、その有用性について検討した。 <結果> 53 例のうち最終的な診断が得られた 43 例を解析対象集団とした。43 例のうち 7 例がランダム皮膚生検で IVLBCL と診断され、1 例が剖検で診断された。皮膚生検の感度と特異度はそれぞれ 87.5%, 100%であった。IVLBCL 群と非 IVLBCL 群の比較では、臨床症状や画像所見では有意差は認められなかったが、検査所見において IVLBCL 群では血清 LDH、可溶性 IL-2 受容体（sIL-2R）値が有意に高く、血小板数が有意に低かった。これら 3 項目のカットオフ値は血清 LDH: 256 IU/L、sIL-2R: 2011 U/mL、血小板数: $107 \times 10^9 / L$ となった。またこれら 3 項目の値に基づいてスコア化したところ、スコア 0, 1, 2, 3 の IVLBCL の確率は、それぞれ 0%(0/11), 0%(0/14), 18%(2/11), 86%(6/7)であった。 <考察> これまで IVLBCL の予測因子として、血清 LDH と sIL-2R の高値は報告されているが、血小板数の低値については報告が乏しい。IVLBCL は、西洋型とアジア型に地域別に分類され、日本を含むアジア型では血球貪食症候群を合併しやすいことが知られている。このためアジア型が優勢な地域において血小板減少は IVLBCL を疑う判断予測因子になり得ると考えられた。またこれら 3 項目の値に基づいたスコアリングシステムで 2 点以上の場合、IVLBCL の可能性が高いことが判明し、ランダム皮膚生検の実施をより積極的に考慮する必要性が示唆された。	
[審査概要] 審査は、約 20 分の発表と約 35 分の質疑応答、そして約 5 分の英語読解力テストを含む形で実施した。発表内容は綿密にまとめられており、研究の背景や仮説、方法論、結果、そして考察に至るまで、理解しやすいものであった。質疑応答では、生検方法の影響、解析方法の具体的な詳細、結果の臨床的解釈、そして今後の課題や発展性など幅広い質問が寄せられ、概ね適切な回答が得られた。	
最終試験結果の要旨	
[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] データ収集や解析方法に関する詳細な質問に対しても適切に回答し、研究に対する真摯な取り組みがよく伝わった。質問に対する回答を通じて、本領域に関する専門的知識を習得していると判断した。また研究への関心が高く十分な研究能力を獲得していると評価した。英語読解力については、英文文献の一部を指定し、その場での音読・和訳により十分な能力があると確認した。さらに発表や質疑応答を通して誠実で礼儀正しく、真摯な態度に終始しており、学位授与に値する人物であると判断した。	